

# 陸羽東線沿線地域方言で格助詞「サ」に後接する「バ」

佐々木 冠<sup>1</sup>

## 要 旨

格助詞「サ」に「バ」が後接する構造（NP=sa=ba）は陸羽東線沿線の宮城県側と山形県側の両方で用いられる。この構造は間接目的語で最も多くの話者に認められ、斜格目的語、着点、斜格主語の順でこの構造を認める話者が少なくなる。格助詞「サ」に「バ」が後接する構造はすべての年齢層で認められるが、若年層と少年層では認められない傾向にある。この構造で用いられる「バ」は格助詞ではなくとりたて助詞として機能している可能性がある。

キーワード：格助詞，与格，方位格，対格，方言

## 1. はじめに

東北地方の方言で用いられる「バ」は強調された目的格として位置づけられることが多い（加藤（1969）など参照。「バ」の格助詞としての位置づけは、菊澤（1934）に見られる）。確かに「バ」は直接目的語をマークすることが多いが、「バ」をもつ全ての方言で「バ」を対格（あるいは目的格）格助詞として位置づけることが妥当かという点については、検証の余地がある。格助詞「サ」に後続し「名詞句+サ+バ」という連続を形成することがあるからである。以下の例文は、遠野地方の昔話のテキスト（「お月お星」『遠野むかしばなし 鈴木サツ自選50話』p.4）からの引用である。

- (1) 姉ッコの寝っ所（とご）サば、俵（たら）寝せでおげや

この例文では、「バ」が「サ」に後接している。「バ」が付いている要素は意味役割としては位置であり、文法機能としても副詞的な位置づけの要素である。ここでは「バ」が直接目的語以外の要素をマークしている。格助詞「サ」に後接しているという事実は、「バ」の格助詞としての位置づけに疑問を抱かせる。

「サ」と「バ」の連続する構造は、遠野地方など岩手県南部の方言だけでなく、古川市（現・大崎市）の方

言でも見られる（筆者は古川市出身の祖母の発話でこのような構造を確認している）。本稿では2010年に行われた陸羽東線沿線グロットグラム調査で得られたデータを用いて宮城県北部および山形県北部において、「サ」と「バ」の連続する構造が用いられる構造、地域、年齢層を明らかにしたい。

## 2. 調査概要

本稿で用いるデータは2010年度の陸羽東線沿線グロットグラム調査で得られたものである。この調査は2008年度から2010年度にかけて小林隆教授を中心とする東北大学国語学研究室が宮城県北部と山形県北部で行った方言調査の一部である。2010年度の調査は、2010年7月31日から8月2日にかけて陸羽東線沿線地域で実施された。調査地点の東端は小牛田駅、西端は新庄駅である。調査地点はこの二つの駅の間25の駅を中心とする地域である。調査地点は、東から西に、1. 小牛田、2. 北浦、3. 陸前谷地、4. 古川、5. 塚目、6. 西古川、7. 東大崎、8. 西大崎、9. 岩出山、10. 上野目、11. 池月、12. 川渡温泉、13. 鳴子温泉、14. 中山平温泉、15. 堺田、16. 赤倉温泉、17. 最上、18. 大堀、19. 瀬見温泉、20. 長沢、21. 南新庄、22. 新庄である。各地点で、高年齢層（60・70歳代）、中年層（40・50歳代）、若年層（20・30歳代）、高校生から1名ずつ調査協力者を募った。各年齢層で複数の協力者を得ることができた地点もある。

<sup>1</sup> 札幌学院大学経営学部; ksasaki@sgu.ac.jp.

この調査では、複数の研究者が調査票に調査項目を設定した。筆者も、「間接目的語」「斜格目的語」「着点」「斜格主語」の四つの要素に関して、以下の例文を調査地点のことばでどのように表現するか問う調査項目を提案し、調査票に入れてもらった。

- (2) 俺には教えてくれないのか (間接目的語)
- (3) この犬は俺を追っかけてくる (斜格目的語)
- (4) あそこには行くな (着点)
- (5) お前にはわかるか? (斜格主語)

調査項目は、格助詞「サ」が用いられる可能性のある要素を含む構文を選んだ。「サ」についてはさまざまな位置づけがなされているが、与格 (dative) や方位格 (allative, ゆくさき格) として記述されることが多い。

間接目的語は典型的に与格が用いられる要素であるので、調査項目に含めた。また斜格の着点は方位格が用いられる傾向にある要素であるため、調査項目に含めた。

斜格主語は、通言語的に見て与格で表されることが多い要素 (Moore and Perlmutter (2000) 参照) であるため、調査項目に加えた。この要素は意味役割としては経験者に対応する。方言によっては斜格主語は与格以外の要素で表される (佐々木 (2004) 参照)。「ニ」などの斜格格助詞と「サ」の使い分けに関しても興味深い事実が見られる可能性が期待できる項目である。

なお、ここで用いる「斜格主語」という名称は便宜的なものにすぎない。その要素が斜格であるにもかかわらず主語と見なせるかどうかは、統語的な機能を調べなければわからないが、この調査では、そういった特徴の記述は行わなかった。また、(5)で斜格主語の例とした要素に対応する方言の要素が斜格で表示される保証はない。事実、調査を行った地域では、とりわけ高年齢層で直接格による標示が優位であった。本稿で用いる「斜格主語」という用語は標準語で「に」でマークされる状態性述語文の経験者に対応する要素と理解してほしい。

斜格目的語の例文として示した標準語の文(3)には斜格要素がない。名詞句は主格 (この犬) と対格 (俺) でマークされている。小林(1998)は、(3)の対格でマークされている要素が宮城県北部 (中新田町 (現在の加美町の一部)) の方言で「サ」でマークされることがあることを報告している (ウサキ<sup>o</sup>サ オエカケタ<sup>o</sup>ウサ

ギを追いかけた])。このように目的語が斜格でマークされる構造は陸羽東線沿線地域でも見られる可能性があると考え、調査項目に入れた。なお、ここで用いる「斜格目的語」という用語も、上に述べた斜格主語と同じ意味で便宜的なものである。

また、「『サ』に後接する『バ』は格というよりはフォーカスのマーカーとして機能しているのではないか」という見込みのもと、調査に際しては、(2)-(5)の例文の下線部の要素に対照フォーカスが来るような文脈を作ることにした。

調査では、「この辺の言葉ではどのように言いますか?」という質問によって(2)-(5)の例文と意味的に等価な構文を引き出すことを目指した。そして、話者が(2)-(5)の例文と意味的に等価な構文を発話しない場合には、「サバ」を含む選択肢の中から下線部の表現として適切なものを選択してもらうことにした。

### 3. 調査結果

#### 3.1. 全体的な傾向

「サ」と「バ」の連続する構造を自分で使う表現として答えた話者は少ない。間接目的語で若年層が1名(陸前谷地)、着点で若年層が1名(長沢)だけであった。

これに対し、誘導で「サ」と「バ」の連続する構造を許容した話者は、それぞれの構文で複数おり、間接目的語で13名、斜格目的語で5名、着点で5名、斜格主語で3名であった。「サ」と「バ」の連続する構造は、地域的には、宮城県側と山形県側の両方に見られる。間接目的語、斜格目的語、斜格斜格に関しては、宮城県側で多く「サ」と「バ」の連続する構造が見られ、着点に関しては山形県側で多く見られた。年代に関しては、全ての年齢層に分布しているが、若年層では少ない。

陸羽東線沿線グロットグラム調査では「サ」と「バ」の連続する構造以外にも、調査対象とした構文に関していくつか興味深い傾向がデータから読み取れた。こうした傾向も含めて、以下の節で、構文ごとの特徴を記述することにする。

#### 3.2. 間接目的語

間接目的語に関するデータを表1と表2に示す。表1は話者が発話した第一回答のみを示した表である。表2は誘導で許容された「サ」と「バ」の連続する構造を含めて示した表である。年齢層ごとの行が2行に

表1. 間接目的語 (第1回答のみ)

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田	
高	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	nr	△	△	○	△	△	△	△	△	△
高										△		△	△				○						
中	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	△	△	○	○	○
中								○															
若	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	○	○	nr	○	△	○	▽	○	○	△
少	△	△	○	△	△	△	○	△	○	○	○	○	○	△	△		○	○	○	○	○	○	○
少	△							△															

表2. 間接目的語 (誘導を含む)

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田	
高	○	△	△	△	△	▽	△	△	▽	○	△	△	○	nr	▽	△	○	△	△	△	△	△	△
高										△		△	△				▽						
中	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	△	△	△	▽	▽	○	○	△	△	▽	○	○
中								○															
若	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	○	○	nr	○	▽	○	▽	○	○	△
少	△	△	○	▽	▽	▽	○	△	○	○	○	○	○	△	▽		○	○	○	○	○	○	○
少	△							△															

なっている地点は、その年齢層の調査協力者が2名いた地点である。たとえば新庄は高年齢層と中年層と若年齢層の調査協力者が1名ずつ、少年層（高校生）の調査協力者が2名いたことが表1および表2から読み取れる。記号と文法形式の対応関係は以下のとおりである。サ類：△＝サ、サワ、サモ、▽＝サバ；ニ類：○＝ニ、ニワ、ニモ。「nr」は回答のなかった項目である。一つのセルが一人の話者からの回答に対応する。

二つの表から「サ」と「バ」の連続する構造に関して次の点が分かる。第一回答では、この構造が陸前谷地の若年齢層で1例認められるだけであるのに対して、誘導で得た形式を含むデータでは、宮城県側だけでなく山形県側でも見られる。地域で見ると、宮城県側で9例、山形県側で4例となっており、宮城県側に多いことが分かる。年齢層で見ると、高年齢層で4例（宮城県側2例、山形県側2例）、中年層で3例（宮城県側のみ）、若年齢層で2例（宮城県側のみ）、少年層で4例（宮城県側1例、山形県側3例）となっている。複数の年齢層で、「サ」と「バ」の連続する構造が見られたのは、宮城県側では西大崎、山形県側では最上であった。西大崎では若年齢層を除く年齢層で「サ」と「バ」の連続

する構造が見られた。

誘導によって得たデータ（表2）も含めた場合、間接目的語において最も多く「サ」と「バ」の連続する構造が見られた。「サ」と「バ」の連続する構造が多くみられるのは、間接目的語において「サ」がよくつかわれる傾向があることを反映しているものと思われる。そもそも、格助詞として「サ」が用いられる構造でなければ、それに「バ」が後接する構造は得られない。「サ」が用いられる構造であることは「サ」と「バ」の連続する構造が現れる必要条件である。ただし、3.4節で扱う着点のように「サ」が用いられやすい構造でも「サ」と「バ」の連続する構造が現れにくいこともある。

間接目的語は、着点に次いで「サ」が用いられることが多い要素である。第一回答のみのデータでは、間接目的語で「サ」（「サバ」や「サバリ」も含む）が用いられた例が62例見られ、誘導で得た回答も含むデータでは64例見られる。なお、高年齢層に限ってみると、第一回答のみのデータでは、「サ」が用いられるデータが20例あり、着点と同数であり、誘導で得た回答を含むデータには、21例あり、着点よりも多い。ただし、第一回答のみの場合、誘導を含む場合とも、若い年齢

層になるほど「サ」が使われなくなる傾向がある。表3および表4が示すように、少年層では38%と50%を割り込んでいる。後述するように着点の場合は、少年層でも「サ」の使用率が50%を上回る。「使用」の列はその年齢層の話者の中で問題となっている形式を使う話者の数を表す。「全体」の列はその年齢層の話者の総数を表す。

間接目的語に「サ」を使わない場合は「ニ」が用いられる。間接目的語に関しては、他の要素と異なり、無助詞の使用例が見当たらなかった。

### 3.3. 斜格目的語

斜格目的語に関するデータを表5と表6に示す。表5は話者が発話した第一回答のみを示した表である。表6は誘導で許容された「サ」と「バ」の連続する構

造を含めて示した表である。サ類とニ類に関しては、表1、表2と同じ記号を使う。斜格目的語に関しては、「サ」や「ニ」といった斜格要素ではなく、「バ」や「ドゴ」といった対格を表示する要素などが見られたため、以下の記号を付け加えた。バ類：◆=バ、◇=バリ、バツカリ；トコ類：■=ドゴ、ノドコ、ンドゴ；その他：☆=ダケ、φ=ゼロ語尾。一つのセルが一人の話者に対応する点は、間接目的語を示した表と同じである。一つのセルに二つの記号が入っている例は、話者の回答が複数の(本稿で記号化した)助詞の組み合わせで構成されている場合である。たとえば、「☆」と「△」で構成されている新庄の若年層のセルは、その話者が斜格目的語を「名詞+ダケ+サ」で表したことを示す。「○」と「☆」で構成されている北浦の少年層のセルは、その話者が「名詞+ニ+ダケ」と答えたことを表している。

表3. 間接目的語 (第一回答のみ)

	使用	全体	割合
高年齢層におけるサ類	20	26	77%
中年層におけるサ類	17	23	65%
若年層におけるサ類	14	22	54%
少年層におけるサ類	10	23	38%

表4. 間接目的語 (誘導を含む)

	使用	全体	割合
高年齢層におけるサ類	21	26	81%
中年層におけるサ類	18	23	69%
若年層におけるサ類	14	22	54%
少年層におけるサ類	10	23	38%

表5. 斜格目的語 (第1回答のみ)

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田	
高	○	△	△	△	△	nr	△◇	◆	△	◆	△	△	○	nr	△	△	■	■	△	■	△	△	△
高										■◆		△	△				△						
中	◆	◆	◆◇	△	◆	ヲ	△	☆	△	△	△	△	■	■	■	△	■	■	■	△	△	△	◆
中								◆															
若	☆△	ヲ	◆	◇	△	◆	◆	△	△◇	■	◆	◆	■	■	φ	○	ヲ	ヲ	◇	△	◇	○	■
少	◆	ヲ	ヲ	△◇	◆	◆	ヲ	◆	ヲ	ヲ	■	■	ヲ	■	■		ヲ	ヲ	φ	nr	○☆	φ	
少	◆							◆															

表6. 斜格目的語 (誘導を含む)

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田	
高	○	△	△	△	△	nr	△◇	◆	△	◆	△	△	○	nr	△	△	■	▽	△	■	△	△	△
高										■◆		△	△				△						
中	◆	◆	◆◇	△	◆	ヲ	△	☆	△	△	△	△	■	▽	■	▽	■	■	■	△	▽	◆	
中								◆															
若	☆△	ヲ	◆	◆	△	◆	◆	△	△◇	■◆	◆	◆	■	■	φ	○	ヲ	ヲ	◇	△	◇	○	■
少	◆	ヲ	ヲ	△◇	▽	◆	ヲ	◆	ヲ	ヲ	■	■	ヲ	■	■		ヲ	ヲ	φ	nr	○☆	φ	
少	◆							◆															

第一回答には、「サ」と「バ」の連続する構造は見られなかった。誘導によって得たデータに含まれる「サ」と「バ」の連続する構造も5例と間接目的語に比べて少ない。5例の内訳は、宮城県側で高年層で1例、中年層で3例、山形県側で少年層で1例である。複数の年齢層で「サ」と「バ」の連続する構造を許容した地点はなかった。

間接目的語や着点と比べると斜格目的語でサ類を用いると答えた話者の数は少ない。第一回答のみで30例、誘導による回答を含めても33例である。表7-8に、斜格目的語におけるサ類の使用率を示す。高年層では半数以上の人サ類を用いると答えているが、中年層より若い年齢層では使用率が半分以下となり、若年層では10%を切っている。

間接目的語の場合と異なり、サ類が使われないからといって必ずしも二類が使われるわけではなく、バ類やトコ類のような対格的な要素が用いられることも多い。表9-12を参照。斜格目的語の現れる構文は、標準語では目的語が対格（名詞句+ヲ）で現れる。標準語と同じ「ヲ」という格助詞を使用する人は、第一回答のみの場合でも誘導を含む場合でも12名であり、バ類やトコ類のような方言的な格形式に比べると少ない。方言的な格形式であるバ類やトコ類は、以下の表に示すようにかなりの割合で使われている。この対格形式の優位は、標準語の影響をうかがわせるものである。

表7. 斜格目的語（第一回答のみ）

	使用	全体	割合
高年層におけるサ類	16	26	62%
中年層におけるサ類	9	23	35%
若年層におけるサ類	5	22	19%
少年層におけるサ類	1	23	4%

表9. 斜格目的語（第一回答のみ）

	使用	全体	割合
高年層におけるバ類	3	26	12%
中年層におけるバ類	6	23	23%
若年層におけるバ類	8	22	31%
少年層におけるバ類	6	23	23%

表11. 斜格目的語（第一回答のみ）

	使用	全体	割合
高年層におけるトコ類	4	26	15%
中年層におけるトコ類	6	23	23%
若年層におけるトコ類	4	22	15%
少年層におけるトコ類	4	23	15%

伝統的なサ類の代わりに使われる対格的な要素の分布には地域的な偏りがある。バ類は山形県側に多く分布し、トコ類は宮城県側に多く分布している。

### 3.4. 着点

着点に関するデータを表13と表14に示す。表13は話者が発話した第一回答のみを示した表である。表14は誘導で許容された「サ」と「バ」の連続する構造を含めて示した表である。使用する記号は、表6までに示したものと同じである。

第一回答には、「サ」と「バ」の連続する構造が1例だけ含まれている。誘導によって得たデータに含まれる「サ」と「バ」の連続する構造も5例と間接目的語に比べて少ない。表15-16に示すように、多くの年齢層でサ類を使う話者が多い。高年層では間接目的語の方がサ類の使用率が高いが、他の年齢層では着点の方が使用率が高い。年齢層が低くなるにつれてサ類の使用率が下がる点は他の項目と同様だが、少年層でも50%以上の使用率となっている。それにもかかわらず、「サ」と「バ」の連続する構造は斜格目的語と同程度しか見当たらない。

調査で着点として使った要素は「あそこ」という場所を示す指示名詞だった。場所を表す名詞は、名詞句階層の上で低い位置づけにある要素である（Silverstein, 1976）。この位置づけは、内在的な話題性（topicality）

表8. 斜格目的語（誘導を含む）

	使用	全体	割合
高年層におけるサ類	17	26	65%
中年層におけるサ類	10	23	38%
若年層におけるサ類	4	22	19%
少年層におけるサ類	2	23	8%

表10. 斜格目的語（誘導を含む）

	使用	全体	割合
高年層におけるバ類	3	26	12%
中年層におけるバ類	6	23	23%
若年層におけるバ類	9	22	35%
少年層におけるバ類	5	23	19%

表12. 斜格目的語（誘導を含む）

	使用	全体	割合
高年層におけるトコ類	4	26	15%
中年層におけるトコ類	5	23	19%
若年層におけるトコ類	4	22	15%
少年層におけるトコ類	4	23	15%

表13. 着点 (第1回答のみ)

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田	
高	ワ	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	φ	φ	△	△	△	△	△	△	△
高										nr		△	△				△						
中	△	△	φ	△	△	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	ワ	△	△	△	△	△	○
中								△															
若	△	○	▽	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	△	○	△	○	△	△	△	△
少	△	△	△	△	△	△	△	△	φ	○	△	△	△	○	△		ワ	○	○	○	△	△	○
少	△							△															

表14. 着点 (誘導を含む)

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田	
高	ワ	○	△	▽	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	φ	φ	△	△	△	△	△	▽	△
高										nr		△	△				△						
中	△	△	φ	△	△	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	ワ	△	△	△	△	△	○
中								△															
若	△	○	▽	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	△	○	△	○	△	△	△	△
少	△	△	△	▽	▽	△	△	△	φ	○	△	△	△	○	△		ワ	○	○	○	△	△	○
少	△							△															

の低さと関連がある。場所名詞の話題性の低さが「サ」に「バ」が後節する妨げになったために「サ」と「バ」が連続する構造が少なかったのかもしれない。

3.5. 斜格主語

斜格主語に関するデータを表17と表18に示す。表17は話者が発話した第一回答のみを示した表である。表18は誘導で許容された「サ」と「バ」の連続する構造を含めて示した表である。

第一回答には、「サ」と「バ」の連続する構造は見られなかった。誘導によって得たデータに含まれる「サ」と「バ」の連続する構造も3例と調査項目中最も少ない。3例の内訳は、宮城県側で高年層で1例、中年層で1例、山形県側で少年層で1例である。複数の年齢

層で「サ」と「バ」の連続する構造を許容した地点はなかった。

調査項目中、サ類を用いると答えた話者の数が最も少ないのが斜格主語である。第一回答のみで19例、誘導による回答を含めても20例である。表19と表20に、斜格主語におけるサ類の使用率を示す。他の調査項目では、若い年齢層ほどサ類の使用率が低かったが、斜格主語の場合はそうではない。第一回答のみのデータでも誘導を含めたデータでも、サ類の使用率が最も高いのは中年層である。高年層ではサ類の使用率は中年層より低い。若年層や少年層は、中年層と比べるとサ類の使用率は低いが、高年層よりは使用率が高い。この傾向は、斜格主語においてもともとサ類の使用が有意でなかったことを含意するものと思われる。中年層

表15. 着点 (第一回答のみ)

	使用	全体	割合
高年層におけるサ類	20	26	77%
中年層におけるサ類	18	23	69%
若年層におけるサ類	17	22	65%
少年層におけるサ類	15	23	58%

表16. 着点 (誘導を含む)

	使用	全体	割合
高年層におけるサ類	20	26	77%
中年層におけるサ類	18	23	69%
若年層におけるサ類	17	22	65%
少年層におけるサ類	15	23	58%

で一旦サ類の使用が広がったが、伝統的な方言形式であるサ類の衰退によってそれより若い年齢層でサ類の使用率が低下したという通時的な変化のシナリオが描けるのではないだろうか。

表18を見ると、高年層でもサ類ではなくニ類を選択する人が多いことがわかる。「サ」と「バ」が連続する構構がこの調査項目で最も現れにくいのは、もともとサ類が使われにくい項目であるためと考えられる。

斜格主語でサ類が用いられにくいのは、格助詞「サ」の方位格的な性質による可能性がある。斜格主語以外の調査項目は、意味役割こそ、受け手（間接目的語）、対象（斜格目的語）、着点と多様だが、いずれも動作を向けられる側である。これらの要素が方位格的な性質をもつ格形式でマークされることは意味的に整合性が

ある。一方、斜格主語は、意味的にみると状態性の構文の経験者であり、動作を向けられる側ではない。状態性の構文に現れる要素なので、そもそも動作というものと相容れないし、経験者も認識の着点というよりはむしろ在り処と見た方がよいので、方位格とは相容れない。同じ斜格でもサ類ではなくニ類という位置的な要素で斜格主語がマークされる傾向があるのは、こうした意味的な特徴を反映したものと考えられる。

斜格主語に関して、サ類の使用頻度の低さ以上に注目すべき点は、サ類やニ類といった斜格要素を使わない話者が多い点である。無助詞(φ)、ワ、名詞句末母音の長音化(表17と表18では「ー」)を直接格標示としてまとめて、その使用率をまとめたものが表21と表22である。高年層と中年層では、直接格による標示が50%

表17. 斜格主語（第1回答のみ）

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田
高	○	○	φ	△	φ	φ	φ	ダラ	φ	φ	△	○	○	φ	φ	φ	φ	ワ	ー	ー	φ	φ
高										0		ン	ワ				ワ					
中	φ	φ	φ	ワ	△	φ	φ	△	φ	△	△	△	φ	φ	△	△	○	ワ	ワ	φ	△	φ
中								φ														
若	ワ	○	φ	ラバ	△	φ	△	φ	○	ワ	φ	ワ	φ	○	○	φ	φ	△	△	φ	○	φ
少	△	φ	○	△	△	φ	○	○	○	○	ワ	○	○	φ	△		φ	○	ワ	○	ワ	ワ
少	φ							△														

表18. 斜格主語（誘導を含む）

	新庄	南新庄	長沢	瀬見温泉	大堀	最上	赤倉温泉	堺田	中山平温泉	鳴子温泉	川渡温泉	池月	上野目	岩出山	西大崎	東大崎	西古川	塚目	古川	陸前谷地	北浦	小牛田
高	○	○	φ	△	φ	φ	φ	ダラ	φ	φ	△	○	○	φ	φ	φ	φ	ワ	ー	ー	▽	φ
高										0		ン	ワ				ワ					
中	φ	φ	φ	ワ	△	φ	φ	△	φ	△	△	△	φ	φ	△	▽	○	ワ	ワ	φ	△	φ
中								φ														
若	ワ	○	φ	ラバ	△	φ	△	φ	○	ワ	φ	ワ	φ	○	○	φ	φ	△	△	φ	○	φ
少	△	φ	○	△	▽	φ	○	○	○	○	ワ	○	○	φ	△		φ	○	ワ	○	ワ	ワ
少	φ							△														

表19. 斜格主語（第一回答のみ）

	使用	全体	割合
高年層におけるサ類	2	26	8%
中年層におけるサ類	8	23	31%
若年層におけるサ類	4	22	15%
少年層におけるサ類	4	23	15%

表20. 斜格主語（誘導を含む）

	使用	全体	割合
高年層におけるサ類	3	26	12%
中年層におけるサ類	8	23	31%
若年層におけるサ類	4	22	15%
少年層におけるサ類	5	23	19%

を超えている。

#### 4. 考 察

陸羽東線沿線グロットグラム調査で得たデータには、「サ」と「バ」の連続する構造以外にもいくつか重要と考えられる文法特徴がみられる。この節では、そうした文法特徴について考察する。

まず、考えたいのが、3.3節に示した斜格目的語における直接格標示である。

「追いかける」のような動詞の目的語がサ類のような斜格要素でマークされる現象が宮城県北部の伝統方言の特徴であることは、小林（1998）のような先行研究によっても言及されている。このような格フレームが調査地域の伝統方言にも存在することが、高年層においてサ類の使用率が高いことからわかる。では、中年層で「追いかける」の目的語が対格的な要素でマークされる傾向があることは、伝統方言からの内的な通時の変化なのだろうか。標準語形式「ヲ」よりもバ類やトコ類といった方言的な対格形式にとって代わられている例が多い点は、内的変化を想起させる。しかし、対格形式が優位になったこと背景には標準語の影響があった可能性も考えられる。

このように考えるのは、「追いかける」のような動詞の目的語が斜格になることは他の言語でも見られる現象である。英語には、「探す (look for, search for)」「見つける (find)」のような意味的に関連する動作 (activity) 動詞と達成 (accomplishment) 動詞のペアがある場合、一方の目的語が前置詞を伴う場合がある。対象の変化が含意されない動作動詞の側が斜格目的語

(英語の場合前置詞目的語)をとる。また, shoot~shoot at のような動能交替 (conative alternation, Goldberg (1995)) でも、前置詞のある側、すなわち斜格目的語がある側が、動作の実現が義務的ではない点で他動性が低い。

「追いかける」という動作動詞は、意味的に関連する「捕まえる」に比べると、対象の状態変化が含意されない点で他動性が低い。このような意味的特徴を持つ「追いかける」の目的語が斜格であることは決して不自然なことではない。主格・対格という他動的格フレームになる意味的動機づけがないので、目的語の対格化は標準語からの影響である可能性がある。

斜格目的語に関しては、「サ」と「バ」の連続する構造に関連して考察したい点がある。中年層よりも低い年齢層で対格標示が増えてくることはすでに述べたとおりである。対格標示に用いられる形式には地域的な偏りがあり、バ類は山形県側で優位であり、トコ類は宮城県側で優位である。「サ」と「バ」の連続する構造は宮城県側と山形県側の両方に存在するが、助詞「バ」の文法的な位置づけが異なれば、表面上同じ「サ」と「バ」の連続する構造でも、異なる分析が必要になる可能性がある。仮に山形県側の「バ」に格関係を示す機能が強いのであれば、「サ」と「バ」の連続する構造は格重複 (Suffixaufnahme, Plank (1995)) として分析できる可能性がある。一方、宮城県側で「バ」に格関係を示す機能よりもとりたて詞的な機能が強いのであれば、「サ」と「バ」の連続する構造は格助詞ととりたて詞の連続と分析できる可能性がある。

3.5節では高年層において経験者主語が斜格で表されない傾向があることを示した。この特徴は東北地方の方言の類型論上の位置づけを考える上で示唆的なデータである可能性がある。

斜格主語が類型論や理論言語学で盛んに議論されるようになったのは1970年代半ばからである。『方言文法全国地図』のもとになるデータは、この時期に企画立案され1979年から1982年にかけて行われた調査で集められたデータであるが、斜格主語が調査項目に入っていない。このため、標準語の「僕にはそれが分かる」や「彼にはロシア語が話せる」が全国の方言でどのように表現されるかはまだ明らかになっていない。語彙的に斜格主語を選択する述語（「わかる」など）があるだけでなく、可能接尾辞 (-e/rare) の動詞語幹への付加が生産的であるため、斜格主語構文が生産的な言語

表21. 斜格主語 (第一回答のみ)

	使用	全体	割合
高年層にける直接格	17	26	65%
中年層における直接格	14	23	54%
若年層における直接格	12	22	46%
少年層における直接格	9	23	35%

表22. 斜格主語 (誘導を含む)

	使用	全体	割合
高年層にける直接格	16	26	62%
中年層における直接格	14	23	54%
若年層における直接格	12	22	46%
少年層における直接格	9	23	35%

であるという性格づけがなされることがある (Shibatani, 2000)。こうした性格づけがどのような範囲の方言に当てはまるのかは、上述の事情により明らかになっていない。

Shibatani (2000) に見られる斜格主語構文が生産的という性格づけが当てはまる方言も存在する。筆者が90年代に記述を行った水海道方言 (茨城県南西部) もその一つであり、自動詞文からの斜格主語構文の派生が排除されない分、可能構文における斜格主語構文の形成は標準語よりも生産的である (佐々木 (2004) 参照)。

しかし、可能構文で主語が斜格化しにくい方言も存在する。現在、筆者は、マックス・プランク研究所の結合価クラス調査目録 (Malchukov *et al.*, 2010) を使っていくつかの方言の態を調査している。その調査の中で北海道と東北地方の方言では可能構文で主語が斜格化しにくい傾向があることが見えてきた。北海道方言では、70ある述語のうち主語が可能構文で斜格化したのは2例だけであった。調査が進行中の東北地方の方言 (五所川原および寒河江) でも今のところ、可能構文で主語が斜格化した例は得ていない。

陸羽東線沿線グロットグラム調査の斜格主語の項目で、高年層で直接格標示が優位であったことは、斜格主語構文の生産性に関して標準語とは異なる類型的特点を反映している可能性がある。この場合の標準語とは異なる傾向とは、水海道方言の場合とは逆で、斜格主語構文の生産性が低い、あるいはその構造を嫌うという傾向である。

## 5. ま と め

この調査によって陸羽東線沿線の宮城県側と山形県側の両方の地域に格助詞「サ」に「バ」が後接する構造を用いる話者がいることが分かった。この構造は間接目的語で最も多くの話者に認められ、斜格目的語、着点、斜格主語の順に認める話者が減る。この構造で用いられる「バ」は格助詞ではなくとりたて助詞として機能している可能性がある。格助詞「サ」に「バ」が後接する構造の文法的性質を明らかにするためには、当該方言において対格を表示する要素についての記述も必要になる。複数の年齢層で「サ」と「バ」の連続する構造が認められる地域もあった。こうした地域の方言をさらに調査することにより「サ」と「バ」の連続する構造の文法的な性質を明らかにしたい。

**謝辞** 調査に際してお世話になった調査協力者の皆さんと東北大学の小林隆先生そして2010年度幹事を務められた川越めぐみ氏と副幹事を務められた津田智史氏に感謝する。陸羽東線沿線グロットグラム調査では次の機関に協力いただいた：美里町教育委員会生涯学習課、美里町公民館、美里町駅東地域交流センター、北浦チック農村集落センター、大崎市産業経済部商工振興課、大崎市中央公民館、池月地区呼応民間、川渡地区公民館、鳴子公民館、中山コミュニティーセンター、最上町教育委員会教育文化課、堺田地区公民館、最上町中央公民館、大堀地区公民館、瀬見公民館、富沢地区公民館、舟形町生涯学習センター、新庄ふるさと歴史センター。調査概要の詳細および調査票は小林 (2011) を参照されたい。本稿は小林 (2011) に収録された佐々木 (2011) に加筆修正を加えたものである。

## 参照文献

- [1] Goldberg, Adele (1995). *Constructions*, Chicago, The University of Chicago Press.
- [2] 加藤正信 (1969). 東北方言概論, 言語生活, 210, 17-29.
- [3] 菊澤季生 (1934). 宮城縣方言文法の一斑, 国語研究, 2(4), 60-91.
- [4] 小林 隆 (1998). 格助詞「サ」, 宮城県中新田町方言の研究, 加藤正信・遠藤仁編, 文部省科学研究費成果報告書, 49-60.
- [5] 小林 隆 (2011). 宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究, 東北大学国語学研究室.
- [6] Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath, Bernard Comrie and Iren Hartmann (2010). The Leipzig Valency Classes Project's Database Questionnaire Manual, <http://www.eva.mpg.de/lingua/valency/pdf/DatabaseQuestionnaireManual.pdf>.
- [7] Moore, John and David Perlmutter (2000). What does it take to be a dative subject? *Natural Language and Linguistic Theory*, 18, 373-416.
- [8] Plank, Frans (1995). *Double Case: Agreement by Suffixaufnahme*, Oxford: Oxford University press.
- [9] 佐々木冠 (2004). 水海道方言における格と文法関係, くろしお出版.
- [10] 佐々木冠 (2011). 格助詞「サ」+「バ」, 宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究, 小林隆編, 東北大学国語学研究室, 60-72.
- [11] Shibatani, Masayoshi (2000). Non-canonical constructions in Japanese, *Kobe Papers in Linguistics* 2, 181-218.
- [12] Silverstein, Michael. (1976). Hierarchy of features and ergativity, In: Robert Dixon (ed.), *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

## **The Particle = *ba* Preceded by Case Particle = *sa* in the Dialects Distributed Along the Rikuu East Line**

Kan SASAKI<sup>1</sup>

### **Abstract**

The structure where the particle = *ba* is preceded by case particle = *sa* (NP = *sa* = *ba*) is found in the dialects distributed along the Rikuu East Line. The grammatical function of the NP affects the acceptability of the structure. It is accepted most frequently when it appears in the indirect object position. The number of speakers accepting this structure decreases in the order indirect object > oblique (theme) object > goal > oblique subject. The younger generation tends not to use this structure. The particle = *ba* (described as accusative marker by some researchers) in the NP = *sa* = *ba* structure can be analyzed as a focus marker.

**Keywords:** Accusative, Allative, Case Particle (Enclitic), Dative, Japanese Dialects.

---

<sup>1</sup>Department of Business Administration, Sapporo Gakuin University; [ksasaki@sgu.ac.jp](mailto:ksasaki@sgu.ac.jp).